**№57　テーマ『感性経営の神髄』**

**講話日2014年2月7日**

**皆さんこんにちは。今年は寒い日が長い間続いて、本当に外の現場でお仕事されているのは大変だなとお察し申し上げます。今日は今年になって第一回目のお話で、テーマは『感性経営の神髄』ということで、今日、時代の流れが変わってきています。理性を原理にしていろんなことをやってきた時代から、感性=心を大事にする時代へと原理が大転換しております。それに応じて、我々は生き方も仕事の仕方も激しく変えていかなければならない。時代が激動・激変の時代と言われておりますので、そういう観点から経営や仕事をする上でどういう心構えが大事になるのかを今日はお話していきたいと思っています。**

**近代の何百年間は人間の本質は理性だと言われてきました。そういう考え方で理性さえ成長すれば、いろんな物事が良くなって、人間も成長すると考えられてきました。だけども、理性を原理にいろんなことをやってきた結果、自然破壊、環境破壊、人間性の破壊などの問題が出てきてしまって、人間性の破壊には離婚の激増、幼児への虐待、ちょっとした違いを理由にした対立が起き、戦争をして殺し合うというような非常に悲しい現実がどんどん問題化しているのが、世界の様相であります。これからも理性を原理にしても良いのかという反省が今、世界的に出てきています。**

**だけども、理性に対する不安や疑問は出てきているんですが、それに代わる原理がちゃんと自覚されていないがゆえに多くの方が、まだまだ理性的な意識でいろいろなことをしているという状況で、なかなか理性の支配から脱却できない。全世界的にいって、人類は理性の奴隷と言われるような状況になっています。まだまだ理性による抑圧、縛られて…いろいろな辛い思いで仕事をし、生きなければならない。それを理性の奴隷と言っています。本当の人間としての幸せの実感を得られないと苦しんでいる人も多いというのが、現実の姿であります。**

**では、どのようにすれば我々は理性の抑圧をはねのけて、もっともっと楽しい、生き甲斐・幸せを感じるような生き方や仕事の仕方に変えていくことができるのか。仕事をしながらもそういうことを考えていく必要があります。理性というものがなぜ我々にとって、苦しい現実をつくり出していて、そのことによってストレスを感じて幸せになれないのか。そのことを理解しないと、理性の支配をはねのける力も命から湧いてきません。ご承知のように理性では真理はひとつと考えます。だから、どうしても考え方が違うとお互いに敵になってしまって、考え方の違う相手の存在を憎く思って、抹殺しようとするような激しい否定的な心情が出てきてしまうというのが、理性を原理にして生きているときの人間関係の様相であります。**

**また、理性というのは矛盾を排除する能力ですので、考え方の違う・自分とは違うという存在を自分から遠ざけて、同じ考え方の人間ばかり集まって、何かをやっていこうという状態になってしまう。そして、理性は画一性を追求するものです。皆を同じ考え方にしていこうとします。自分とは違う考え方の人間を説得しようとして、同じ考え方にしてしまおうとします。相手の個性を認めない、許さない。理性を原理にして生きていくことで、確実にいろんな意味での対立が出てきて、人間関係に苦しむという状態になってしまう。それが離婚の激増にも繋がるし、自分の言うことを聞けない子供が憎い…と、幼児への虐待にまで発展してしまう。考え方が違うと一緒にやっていけない、価値観が違うと一緒に仕事ができないと感じる人は、まだまだ多いと思われます。た**

**だ、よく考えてみれば、相手が自分と同じように考えてくれないと一緒にやっていけないという人は、実は自分しか認められない・愛せないという心情の持ち主なんですよね。自分しか愛せないような愛は偽物の愛です。自分しか愛せないような愛でどうして子孫を残せようか。本来、愛というのは種族保存の欲求が根底にあるものです。愛とは、自分とは違う存在を認めて必要とする精神であります。**

**だけども、我々が生きていかないといけない現実というのは、感じ方、考え方、価値観、宗教、文化…それぞれ違って当然で、混在するのが社会であります。人間らしい血の通った温かな心を持って仕事をして生きていこうと思ったら、他人と共に仲良く生きていけるという状態に人間性を成長させなければ、対立を乗り越えてやっていけない。全世界的にいって統合の時代と言われ、違ったものを結びつけることが時代の方から人間に要請・要求されているという状況です。“統合”という言葉が今、盛んに使われていて、さまざまなものが統合を求められているという時代になってきています。この流れから、全世界的に理屈ではなく心が欲しいという叫びが挙がってきています。血の通った温かな心が欲しいという気持ちが、多くの人から出てきていて、産業レベルで言うと、心の癒やしを商売にしたものが大きな広がりを見せています。多くの人が何らかの形でストレスを感じていて、理性の支配から自分を解放したい、心が癒やされたい…自分が本当に欲しいのは心を満たすものだ、という流れができています。これらに応じて、これからは理性を原理にするのではなく、心・感性を原理にした生き方、またはそういう生き方ができる人間に成長していくことが、望まれています。**

**では、なぜ理性の次に感性ということになるのか。世界史的に言うと西洋の時代は終わって、これからは東洋の時代が始まるというのは、誰しもが実感としてわかっていると思います。西洋から東洋へ、という世界文明の移り変わりが何を意味しているのか。西洋は理性を原理にして合理性を追求する文明をつくってきた地域。アジア（東洋）は昔から感性・感じることを大事にしてきました。感性の実感で掴んだものを言葉で説明するような形での文明をつくってきました。仏教、儒教、老荘思想、日本の思想でも、理屈ではなく感性の実感で感じたものを悟りとし、それを言葉で表現するような文明のつくり方をしてきました。**

**この違いがどのように出てきているかと言うと、欧米人は能力主義と言われ、理性能力の優れた人間を尊敬する風土があります。アジア（東洋）というのは、頭の良い人よりも金持ちよりも、物がある人よりも人間性において優れた人物を尊敬する風土なんですね。欧米人が能力主義だとすると、アジア人は人格主義。この人格の柱となっているものが、実は心・感性なんです。我々が「俺・私・自分」と言っているものは欧米では理性なんですよ。アジア（東洋）では、本音・実感・欲求・欲望・感情など命から湧いてくる興味・関心・好奇心が、「俺・私・自分」の本体だとするのが人間観であります。西洋とアジア（東洋）では人間観の違いがあります。これからは欧米（西洋）が衰退していってアジア（東洋）が発展していくという流れですから、全世界的にも能力主義よりも人間性において優れた人を尊敬するということが、望まれるような時代がやってくると言わなければなりません。決して理性がダメだと言うのではなく、もっと大事なものが心だという時代になってくるということなんです。理性の時代から感性の時代へと変わる流れと言えます。**

**もう少し哲学的に考えていくと、なぜ近代は理性の時代になったのか。中世の時代に原因があって、宗教や信仰という非合理・不合理な力によって人間が支配・抑圧されていた。それに対抗して命から合理への要求が目覚めてくるという構造ができあがってくるわけです。その結果、近代は**

**理性を大事にする時代となりました。そうして近代は理性によって支配され、理性による命令の通りに動く、理性を大事にして生きるという時代になってしまいました。理性や合理性に縛られて生きると、命の中に眠っている非理性的・非合理的な力が目覚めてくるという構造ができてきます。命の中に眠っている非理性的・非合理的な力は、感性であり、心なんです。そうして、これからは感性・心の時代になっていくのです。これが哲学の歴史である、精神史の観点から時代の流れを見た場合の方向性の根拠、理由なんですね。理性によって支配されるのではなく、我々人間が支配して使いこなしていかなければならない。**

**では、なぜ理性を支配しなければならないのか。理性能力は我々が持っている能力のひとつに過ぎない。だから、理性は脳という肉体に限定された能力が理性。部分的な理性に人間が支配されるのは、本末転倒と言えます。人間が理性を支配して生きるという生き方をしていかなければならない。では、理性を使って何をするのか。考え方の違う人とどうしたら一緒にやっていけるのか、を理性を使って考える。理性を手段能力に使って考える。価値観の違う人とどうしたら一緒に仕事ができるんだろうと理性を使って考える。そういうことをこれからはやっていかなければならない。理性的に考えると価値観の違う人とは一緒にやらなくても良いと考えますが、もうこれからはそんな時代ではない。これからは皆の個性を重んじながら生きていかなければならないから、考え方の違う人とも仲良く生きなければならないし、価値観の違う人とも仲良くやっていく力を付けなければならない。宗教・民族が違っても殺し合わないという生き方ができる人間に人類は成長していかなければならない。それが望まれているわけであります。**

**考え方、価値観、宗教、民族が違う人と共に生きることを矛盾を生きると言います。理性は矛盾を排除しますから考え方が違うことは敵になる…でも、我々がこれから生きていかなければならない力は、矛盾を生きる力。これは、理性で矛盾を排除して対立して殺し合う、そういう生き方よりも高度な生き方であります。矛盾を排除するよりも肯定して矛盾を生きることは、西洋人の生き方よりもより高度なアジア人の生き方であります。そして、矛盾を生きる力を愛と言います。なぜ矛盾を肯定するのかと言えば、現実に社会にはさまざまな人間が存在します。彼らと仲良くやっていくためには、そういう力が必要になるからです。つくっていかざるを得ない。それができなければ、離婚激増は止まらない、幼児への虐待も防げない、宗教・民族戦争もなくならない。永久に家庭にも世界にも平和は訪れない。矛盾を排除することよりも高度な矛盾を生きる生き方を求めていかなければならない。本当に我々が幸せに生きていこうと思ったら、考え方・性格・価値観が違う人とも共に生きていく力というものをつくっていかなければならない。そうしないと自分も相手も不幸になってしまう…そういった現実が突きつけられています。**

**どうしたらさまざまな人とうまくやっていけるのか、違いが出たらどうしたらそれを乗り越えて一緒に生きていけるのか。このことを我々は考えて、それを実践していける人間に成長していかなければなりません。なぜ、考え方の違いが出てくるのかを考えなければなりませんし、知る必要があります。生まれながらに考え方が違うということはありえません。後天的にできてくると考えられます。どういうことなのかと言ったら、体験が違ったら考え方が違ってくる。経験が違ったら考え方が違ってくる。持っている知識・情報が違ったら考え方が違ってくる。物事の解釈の仕方が違ったら考え方が違ってくる。人生におけるさまざまな出会いが考え方の違いをつくってくる。出会いはどういう事件と出会ったか、どういう事故と出会ったか、どういう犯罪と出会ったか、どういう人と出会ったか、どういう本と出会ったか。様々な人生の出会いが人間の考え方や価値観**

**を作り出していくんですね。つまり、考え方の違いの原因が五つ出てくるわけであります。体験・知識・経験・情報・出会い・解釈の仕方の違い。**

**体験と経験は英語で言ったら両方ともエクスペリエンス、日本語で言えば体験と経験では次元が違うんですね。体験というのは、自分の肉体が外の世界とか関わった事実のことを体験という。経験というのは、その体験から自分が何を学びとったかが、経験内容なんですよね。同じことを体験しても、人間性の違いによってその体験から学び取るものは、人間によって個性によって皆違ってくる。そういったことも考え方や価値観の違いに結びついてくということなんです。**

**相手は、自分には無い体験・知識・経験・情報・出会い・解釈の仕方を持っているというわけなんです。人間が人間として成長していくためには、同じ考え方を持っている人間とばかり付き合っていたのでは、成長しない。成長するためには自分に無いものを持っている人と付き合って、無いものをもらわないと人間は成長しない。相手から本気で学ぼうという気持ちがなければ、人間は本当に成長しないということなんです。対立という状況が出てきた場合に嫌だなと思うのではなく、「一体この人は自分に無い何を持っているのか」、「一体この人は自分に無い何を持っているから対立するのか」と考えて、自分に無いものを探し出して、それを学び取るという努力をする…これが愛なんです。また愛の努力とも言います。愛するとは学ぶこと。そのためには、相手のことをよく知ろうとすること。相手のことをよく知れば、相手のダメなところを助けてあげて、相手の良いところで自分は助けてもらう。そういう関係性をつくっていくことができるわけですね。今後は対立という状況ができたら、成長の場だと利用しながら活かしてみてください。**

**これによって今まで対立していた人間との関係性にも変化が出てきます。「あの人から自分は何かを学ばないといけないんだ」と考えるようになり、人間性が成長していきます。相手から自分に無いものを見つけ出して、学んだら、その出会いに感謝できる。この人間性の成長が近代的な人間からすれば、格段に人間性・度量が大きい、包容力がある…そういう人間になれるのです。だんだんと理屈ではない、愛の力でいろんな問題を乗り越えていける…そういう人間に成長していけます。**

**このようなことを経営に落とし込んだらどうなるのか。これまでの資本主義経済下における理性型の経営というのは、支配と命令と管理の経営。理性的な人間は部下に支配と命令と管理を行います。そのことによって、組織にストレスが生じて社員は苦しんでしまう。感性型の経営は、愛と対話とパートナーシップの経営となります。愛・対話・パートナーシップを原理とした経営。精神原理を理性から感性へと移行させようとしている時代において、経営も仕事の仕方もまた確実に変えていかなければならないと言えます。とにかく、意識を支配と命令と管理から愛と対話とパートナーシップへと人間関係、関わり方を変えていかなければならない。現実に多くの人が求めているというのも事実です。「支配・命令・管理されたくない」が今日の若者の偽らざる心情であります。**

**組織を団結力あるものにしていくために支配と命令と管理が役に立たなくなった職場において、どういうものが取って代わるのか。愛と対話とパートナーシップという原理であります。愛の力を磨いていって、考え方や価値観の違う人間をも包み込んで、一緒に仕事をして指導して、お互いが協力し合って生きていくことができる…そういう状態を愛を原理にしてつくっていかないといけません。命令ではなく対話も大事になってきます。ちゃんとお互いに了解し合って、納得して仕**

**事をしていく力を磨いていかなければならない。そして、パートナーシップ。管理という形で言うことを聞かせてまとめるのではなく、お互いに助け合う関係性を築く。組織というのは熟練者と未熟練者がいて、縦型の階級がある…これが大まかな組織の形です。簡単に言えば、経営者も社員に助けられているんだ。また社員も経営者がいてくれるから仕事ができている。経営者はひとりでは仕事ができないから多くの人を雇って代わりに仕事をしてもらっているんだと。社員は各部署で働くけど、全体をまとめていく人が必要だからまとめる力のある人が経営者として役割を果たしている。経営者も社員もパートナーなんだ、なければならない必要な存在。リーダーも部下に対して「ありがとう」と感謝をするし、部下もリーダーに対して「ありがとうございます」と感謝をする。役立ち合って、感謝をしながら関わっていく関係性をつくっていく必要があります。これが経営上の大転換の内容であります。**

**「支配と命令と管理は嫌だ」というのは、皆が感じていることですから、それに取って代わるにはどうすれば良いのか=愛と対話とパートナーシップという精神なのです。愛と対話とパートナーシップを一言で言うならば、統合能力。あらゆるものを結びつける力。今、全世界的のあらゆるものを統合能力が動かし始めている。毎日毎日「統合」という言葉が出てくるわけです。繋がりをつくっていく、結びつきをつくっていく、絆をつくる…それが世界のトレンドであります。その統合能力はどうしたら成長するのか。それは、愛と対話とパートナーシップだ。この能力を磨いていかなければ、統合能力も成長しないし、理屈・理性よりも素晴らしい生き方、仕事の仕方は出てきません。**

**時代が変わっている今、理性から感性への大転換期、ということは全分野であらゆるものを激変させていかなければならない。近代から次の新しい時代へと原理的に転換していく状況にあるのが、時代の流れの方向性です。時代そのものが我々に「変われよ」と叫んでいます。この時代の流れに応じて我々は自分を激しく変えていくことが求められている。そういう意味でもいろいろなことをやってもらいたいと思います。**

**その大まかな流れの中で感性経営はなんなのか。感性経営の神髄と言える中心原理はなんなのか。一番目に挙げられるのは心の通う経営ということがあります。これまでは理性でお互いが分かり合って、理屈で結びつくという経営・会社でした。それで、資本主義経済下における会社の組織は理性によってつくられていますので、仕事・役職の繋がりという合理的な組織だけを持って動いていました。人間の本質が理性から感性に変わってきていますので、会社と言っても人間の繋がりですから、会社も人間同様、在り方が変わっていかなければならない。仕事・役職の繋がりよりも大事なのは、心の繋がりなんだと心得て、組織の土台に心の繋がりを置く、その上に仕事・役職を乗せていく。その三次元構造で会社を運営させていかなければならない。会社の団結力をつくる最も大事な核になるものは、全社員の中に心の結びつき・通い合い・絆をつくっていくことが、団結力の原理と言えます。心の結びつき・通い合い・絆がなければ、そこにあるのは支配でしかない。結局、人間が苦しまなければならない。心の結びつき・通い合い・絆がつくられて、初めて会社は人間的な・心ある組織に変身ができます。**

**では、心の結びつき・通い合い・絆をつくって団結力を生んでいくためにはどうしたら良いか。それは、心をあげること。時代の流れとして心が欲しいと言っているのに、理屈をあげていたのでは噛み合わないし、すれ違いになりますから心は満たされない、幸せになれない。では、心が欲しいとは、心をあげるとは。それを全社員がわかっていて付き合わないと、新しい時代の会社組織はで**

**きません。**

**心が欲しいとは何か。これを考えるためには、人間の実質的な本質は意志と愛という感性論哲学が必要。この二つがあれば、どんなことでもうまくいくし、幸せな成功の人生をつくっていくことができる。意志の力とは、物事を最後までやり遂げる力。愛の力とは素晴らしい人間関係をつくること。この二つが感性論哲学の基本原理であります。意志という力が自己実現の力として命に働いていますから、そこから出てくるものはなんなのかと言ったら、認めてもらいたい・わかってもらいたい・褒めてもらいたい…そういう気持ちが出てきます。愛において心が欲しいというのは、好きになってもらいたい・信じてもらいたい・許してもらいたい・急がさずに待ってもらいたい、これが愛を原理にした心が欲しいと言われるものです。**

**皆、何が欲しいと思っているのか。それは、認めてもらいたい・わかってもらいたい・褒めてもらいたい。誰もけなされたくない、注意なんてされたくない、叱られたくないんだ。それが心が欲しいという叫びなんです。愛を原理にしたら、好きになってもらいたい・信じてもらいたい。疑うような目で見られたくないんだ。不完全な人間なので許してもらいたい・急がさずに待ってもらいたい。愛とは、好きになること・信じること・許すこと・待つことなんです。現代人は例外なく皆、それを求めているんだ。皆、認めてもらいたい・わかってもらいたい・褒めてもらいたい・好きになってもらいたい・信じてもらいたい・許してもらいたい・急がさずに待ってもらいたい。**

**つまり、心をあげるというのは、認めてあげる努力をすること・わかってあげる努力をすること・褒めてあげる努力をすること・好きになってあげる努力をすること・信じてあげる努力をすること・許してあげる努力をすること・急がさずに待ってあげる努力をすること、これが愛。心が欲しいという叫びに応じて心をあげないと、心の結びつき・通い合い・絆はできません。職場だけではなく家庭でも親子でも同じ、会社でも上司と部下、同僚との間に心の結びつきはできません。まず、これからの時代を生きるために一番必要な人間性・人間力と言うことができるものは、心が欲しいという叫びに応じて心をあげる力です。だけども、まだまだ心をあげるとはどういうことをするのかをわかっていない。自分の中に心が欲しいという叫びはあっても、実は何を求めているのかもわかっていないのが現実なんです。であるがゆえに、団結力、崩れない人間関係はなかなかつくれていないのです。**

**まずは、心の通う経営…つまり、心がお互いに通い合う組織をつくることが感性経営の土台となる課題なんだと知ってもらいたいし、心の通う経営・会社をつくっていこうと思ったら、心が欲しいという叫びに応じて心をあげる努力をしなければならない。現実になかなか心が通い合うという結果が出なくても、愛は努力ですので、「どうしたら心の結びつきができるだろうか」を理性で考えて、こうしよう・ああしようと努力することが大事なんです。相手が自分のことをどれだけ愛してくれているかを知ろうと思ったら、相手がどれほどの自己犠牲的努力をしてくれるかを見れば良いのです。逆に、自分が相手のことをどれだけ愛しているかを知ろうと思ったら、相手にどれほどの自己犠牲的努力をできるかを見れば良い。愛の実践的原理は努力。例え結果が出なくても努力をすることが愛があるということの実証になります。このことを忘れないで生きてもらいたいと思います。**

**続いては、問題を恐れない経営です。問題を恐れないで仕事をする。人間は不完全な存在ですか**

**ら、完璧や完全はあり得ない。どんなに頑張ってもどこかに物足りないところ、もうちょっと…というところがあるのが不完全な人間の仕事の仕方の現実であります。それがために会社があって、会社は自分の足らないところを補ってくれて、お客様に十分な満足を与えてくれるような結果を出す存在なのです。一人ひとりの仕事にはそれぞれ不完全なところがある。ですから、不完全なところに気付いたのなら、それを責めないで補ってあげて、皆が寄り添ってお客様に本当の満足を与える仕事をしていくのが、会社を通して仕事をしていくという素晴らしさ、意味、価値なんです。そういうのも愛の仕事の仕方なんです。普通なら、誰かがやった問題の場合、その人を責めて非難することもありますが、それは理性的な対応の仕方。これからの時代の愛の経営、感性経営において仕事をしていくには、ミスや問題があったら皆で補って、最終的にお客様に感謝してもらうような結果に結びつけていくのが、会社という組織力で仕事をするということになります。**

**一人ひとりの仕事はそれぞれ不完全なんだ、問題が出てくるのは当然と考えることが必要になります。問題が起きても当事者を責めずに、助けてあげよう・役に立ってあげようとすることが血の通った温かな心。失敗や問題点、短所を責めることには、血の通った温かな心は微塵もない。そこには理性だけ。血の通った温かな心があったのなら、そっと手を伸ばし助けてあげる。本来、人間にはもともとそういう心を持っている。川で子どもが溺れているという状況を見れば、大変だと思って自分が飛び込んで助けてあげたくなっちゃう気持ちが湧いてくる。それが血の通った温かな心なんだ。理性的な人はそれを眺めているだけで事実しか客観的に見ようとしない、心が働かない。よくある話で誰かが線路に落ちた場合、自分の身を挺して落ちた人を助けてあげたいと思い、パッと飛び込んで助け上げ、自分は電車に轢かれて死んでしまったという。自分のことを犠牲にしてまで相手のことを救ってあげたいと思うのが愛。それが血の通った温かな心、人間らしい心の表現であります。それはどんな人にもあります。こういう気持ちを大事にして、これからは仕事をしていかなければならない。**

**一人ひとりの仕事にはそれぞれ不完全なところがある。ですから、不完全なところに気付いたのなら、それを責めないで補ってあげて、皆が寄り添ってお客様に本当の満足を与える仕事をしていくのが、会社を通して仕事をしていくという素晴らしさ、意味、価値なんです。そういうのも愛の仕事の仕方になります。そういったことも会社に勤めている限りは、ちゃんと心得ていなければならない。簡単に人の短所を責めるような醜い人間になってはならない。**

**問題はなんのために出てくるのか。不完全な人間には問題は避け難いものですが、それは自分自身をさらに成長させるため、会社を発展させるため、社会を良くするために出てきます。「ダメだ」とその人を否定するために出てくるものではありません。問題が出てくるのは、すべてのものを成長発展させるため。なぜなら、人間は問題や悩みがなければ、成長しないから。問題や悩みがあるから「どうしようか」と努力をするから成長する。会社に問題が出てきてくれたら、今何をしなければならないのか、今まずやらなければならないことはなんなのか、そのことを教えてくれるために出てくるんだと考えなければなりません。**

**問題が出てくることを恥じてはなりませんし、失敗することを恥じてはなりません。それは不完全な人間なら当然なんだ。有名な孔子の言葉にもありますが、「過ちては則ち改むるにること勿れ」。間違ったということがわかれば、それを修正することを恥ずかしいと思って、間違いを隠し**

**て言い訳をしてはならない。間違ったら竹を割ったようにすぐさま謝る、これは十分に立派な人間のすることなんだ。人間としてダメなのは、間違ったと人から指摘されたり、自分でもわかっているのに、素直に謝らないであれこれ言い訳をしてしまう。ここに人間としての醜さ、間違いという姿があります。**

**さらに孔子は、「人の過や、各々其のに於いてす。過を観てに仁を知る」とも言っています。人間は皆、間違うのだけれど、間違いの仕方というところに人間の値打ちが出てくるもんだ。どのような間違い方をするかによって、その人間の本質や立派さ、どの程度の人間かがわかる、というものです。**

**「過ちては則ち改むるにること勿れ」→即座に謝れば立派な人間なんだ。「人の過や、各々其の党に於いてす。過を観て斯に仁を知る」→その人らしい間違いをする。そして本質もわかる。間違いを見れば、どの程度の人間なのかがわかる。間違ってはいけないとは、言ってはならない。不完全なのだから、間違って当然。失敗も嘘も、騙すことも罪を犯すこともある…それが不完全なのだから。自分自身も間違ったら即座に謝る、そういう力を人間として持つ必要があるし、他人が失敗したときに助けてあげる、補ってあげる。そして、それを皆で完全な状態に近づけていくという関わりをしてあげる。それも人間として立派なチームでの仕事の仕方と言えます。失敗するのは不完全なのだから当然。それをどう皆で補うかが組織力だと忘れてはいけません。**

**問題が出てくることを恐れると、勇気ある行動ができなくなります。もしかしたら失敗する…失敗するかもと思うから止めておく…実践力、行動力が出てきにくいんですね。不完全な人間には問題は避け難いもの、出てくるのは当たり前。問題ないことの方が異常なこと。ひとりの人間には完璧な仕事なんてできない。どこかに落ち度があるもの。**

**幸せということから考えてみると、早く問題や悩みの無い状態を想像しがちですが、人間には完璧なことがないので、現実には問題や悩みが無いことなどあり得ないのです。早く問題や悩みの無い状態になりたいという人は、一生不平不満を言いながら人生を終えていきます。問題があることが当然、健全な状態。問題が無いと思うのは、問題が見えていないという一番危険な状態と言えます。問題がある=健全、問題が無い=異常ということを自分の人生だけではなく、仕事上も忘れてはいけません。自分の仕事を見て、「自分は完璧な仕事をやった」と思うことはとんでもない思い違い。問題が無いと思うこと自体が、大問題なのです。完璧な仕事をやったと思う仕事をしてしまうと、あとから十分でなかったところが問題点として出てきてしまって、とんでもない恥をかく…そんなことも仕事上、多々起こり得ます。常に自分の仕事は不完全なんだと謙虚な気持ちを持って、気付かない問題点に人が気付いたのなら、助けてもらって感謝をしてチームで仕事をしていく。そういう精神を会社に勤めている限りは持っていないと、本当に良い仕事はできません。**

**仮に、点検後に「何も問題はありませんでした」「そうか、良かったな」と脳天気なことを言っていてはいかんのです。ちゃんと調べたら問題が無いことなどあり得ないのです。ですから、「もう一度見てこい」と言うくらいの気持ちが大事なんです。しかし、現実には点検整備をしても見落としがあって、大事故に繋がる…そんなことが世の中にはわんさか溢れています。もっともっと、自分の目には見落としがある、自分では気付かない問題点があると思い、そういう配慮をし、何人か**

**の目を通して仕事をしていくような、チームでの仕事の仕方というものを確立していかないといけません。**

**問題と悩みがなくなったら成長は止まる。問題と悩みの無い人生・結婚・職場は無い。どこに行っても問題と悩みはあるもの。それを解決することによって人間は成長するんだ。問題が出てくることを恐れてはならない。問題が出てこないように願って仕事をしていては、消極的な仕事の仕方になってしまう。決してお客様に本当の満足を与えることはできません。**

**次は、第四番目の変化をつくり出す経営です。**

**理性はあらゆるものを固定化するもの、感性は変化を求めるもの。変化がなければ死んでいるということ。生きているということは、変化すること。本当に会社や仕事に活力をつくっていくためには、変化をつくり出すこと。変化をつくり出さないと生きているという状態にはならない。ですから、変化をつくり出すということは大事なことになります。成長もこの変化に含まれますから。まったく成長していないということは、変化していないということ。**

**厳しい言い方になりますが、例えば、今日は昨日よりもっと素晴らしい仕事をしよう、というように日々脱皮するように、昨日の自分を抜け出して、今日の自分をつくっていく気持ちが大事な努力となります。日記をつけている方もいらっしゃるかと思いますが、今日一日生きた証・意味はなんなのかということを書き留めていく、これが日記をつけていく大事なやり方です。今日はこの人に会ったことが成果、今日はこのことに気付けて成長できたとか、今日一日をもって得た気付きや成長を日記に書き留めていく。後から見たら我ながら感心することも多いです。あのときはこんなことを考えていたのか、という発見や感動をもたらしてくれます。**

**とにかく、感性は変化を求めるもの。変化がなければ、退屈なんです。感性を原理にした仕事の仕方・生き方というのは、毎日「昨日とは違う今日をつくる」ものです。人間というのは基本的になんのために生まれてくるのかというと、歴史をつくるため。我々は新しい時代をつくるために生まれてきているんだ。そのことを考えれば、自分が生まれてから死ぬまでに、今までの人間が誰もやったことのないことをなにか一つはやって、生きて死んでいく…これがこの時代に生まれてきた意味だということを考える必要があるわけですね。仕事においては、この時代に生まれてきてこの仕事をしているということは、この仕事の歴史をつくるためだと、考えることがその仕事の本当のプロが考えることなんです。一歩でも先に進める、仕事を進化させるために自分は関わろうという気持ちがなければ、プロとして仕事をしているとは言えません。誰もやったことのないことをしなければならない。そのためには、命令通りに動いていてはならない。命令も一応聞かないといけないが、自分なりに自分らしい努力をして、世間をあっと言わせるような素晴らしい成果・進化をつくり出せたら、最高の人生になるわけですよね。**

**仕事の中では、改良・改革ということが常に求められ、決められたことを決められた通りにしているようでは、人間として物足らない。自分が関わった限りは、自分が関わった印を残していく。そのために一歩でも何かしらの改良・改革を提案・提言することが、プロとして仕事をする上で大事な課題になるわけです。この会社に入社したからには、ただ、言われたことをするだけではなく、なにか自分らしい創意工夫、改良・改革をして、会社の発展に貢献しようとする思いがなければならない。入社した意味を皆に示すように。これも自分が入社したことの存在感を示す方法でもあります。**

**経営という観点から見れば、変化をつくり出すにはいろいろとあって、去年とは違い、今年からは全社員の誕生日に金一封を贈ろうとか、奥様の誕生日に花を贈ろうとか、そういう変化をつくり出すことが言わず語らず、何かしら会社に明るい方向性へと導く、良いきっかけになっていきます。活性化の根本原理として変化をつくり出すということがあります。変化をつくり出すということは、会社の活力をつくる方法だとわかっておいてもらいたいと思います。**

**後半の話に入ります。先ほどは変化をつくり出す経営を申し上げましたけど、基本的には日常の創意工夫、改良・改革という意識が大事なんですけど、もう少し深い話になると創造力ということになります。なにか自分らしい創意工夫、改良・改革をして、会社の発展に貢献しようとする思いのためには、実践的にどういうことが大事になるのか。創造力、創造的な力を発揮する方法として、現実への違和感という感性の実感があります。「ここのところどうにかならんかな」「納得できないな」「もう少し便利にならないかな」という違和感が湧いてくる…これを現実への違和感と言います。これはものすごく大事なことで、創造力の原理と言いましょうか、実際に創意工夫、改良・改革が行なわれる根底にある原理です。**

**違和感はどうして湧いてくるのか。「きみこそまさにこの違和感を解決するために生まれてきた者」として、その納得できないことを納得できるものにすることが使命なんだと。それこそ人生を懸けた大仕事なんだと、自分に告げてくれているとも言えます。現実への違和感とは、自分がこの時代に生まれてきた意味、使命を教えてくれるものである。天が、時代が、自分に告げてくれている。そういう意味では、天が、歴史が、自分に囁きかけてくれている“天の掲示”“天啓の一瞬”と言えるほど、大事な現象なんです。しかし、ほとんどの人がこの違和感を「まぁ、いいか」とし、「誰かがやるだろう」と自分でやらずに放っておく。これは非常に勿体無い対応で、なんとか形にしようとする努力をすれば、「これは自分がやった仕事だ」と歴史に名を刻んで死んでいける、自分の命を歴史に刻印して死んでいける価値のある仕事に結びついていきます。多くの人が大事なものと思わないで、うっかり見過ごしてしまっています。生活上、仕事上でふと出てくる現実への違和感、「ここのところどうにかならんかな」「納得できないな」「もう少し便利にならないかな」というふとした気付きをもっともっと大事にして、自分らしい仕事をしていくきっかけを掴んでもらいたいと思います。**

**もうひとつ大事な創造力の原理として言っておきたいことは、常識で考えるのではなく、常識を考えることをクセにしてもらいたい。「これはこうするものだよ」と言われたら、例えなんの疑いが無くてもそこに疑問を持ち、「本当にこのままで良いのか？」と問うてみてください。**

**とにかく時代は、あらゆるものが激しく変化するものです。今から100年前は明治維新でしたが、そこから100年経つと、あらゆるものががら〜っと変わってしまう。家も違う、服装も違う、街の中にあるものがすべて違う。これが感性というものがつくり出す実態であります。変化は感性がつくり出す、感性がなにかおかしいと思わないと、変化をつくり出すという力は湧いてきません。感性がなんとかならんかな〜と思うことで理性が働き始めて、ではどうしようかと考えて変化ができてくるわけであります。ですので、感性がなにか違和感・問題を感じるというのは、ものすごく大事な変化の原理なんです。これから100年先もものすごく変わっていくでしょう。ですから、どんなに確かそうに見えることでも一度は「本当にそうなのか？」「このままで良いのか」**

**と言ってみる必要があります。そこで「このままで良いのか」と言えば、「このままで良いわけはないよな」となって、そこから固定観念・先入観念の支配から自分自身を救い出すということになって、固定観念・先入観念に支配されないで新しい着想を持つことができます。**

**皆、創造、創造と大事さを説きますが、今、自分の持っている固定観念・先入観念または技術や知識でなんとかしようとするから、何も出てこないんです。本当に新しいものを創造しようと思ったら、今自分の持っている固定観念・先入観念・常識にとらわれることなく、何事かを発想する自分をつくらないと本当の創造力は湧き出てきません。固定観念・先入観念から解き放つための方法論は、「これはこうするものだよ」と言われたら、「果たしてそうだろうか」と例えなんの疑いが無くてもそこに疑問を持ち、「本当にこのままで良いのか？」と問うことです。常識で考えるのではなく、常識を考える。この発想もプロならば誰も気付かない変化をつくり出す力を持たないといけません。非常に大切な、プロとしての仕事の仕方の一つと言えます。**

**続いて第五番目、仕事に死ねる愛の経営。理性では、計算高い仕事の仕方をしますから死ねるという気持ちにならないのですが、理屈を離れて長い間同じ仕事をしていると、なんとなくその仕事に愛着が湧いてくるわけです。自分自身では死ねるとは思っていないんだけど、結果として何かことがあったときに命も顧みず、勇気ある行動を取ることが出てくることがあります。プロというのはその仕事の素晴らしさ、すごさ、意味や価値を「一番自分が知っている」という自負を持って、初めてプロと言えるのです。人間というのは本当の意味や値打ちや価値や素晴らしさを感じると、死んでも良いという境地に至る。なぜなら、命は常に燃えたいんだ、燃え上がりたいんだ、燃えて生きたいんだ。それが命が一番生かされている瞬間ですから。**

**命そのものは生きたい、生きたいと思っているもの。命が一番生かされる・燃えるときというのは、「このためなら死んでも良い」と思えるものに出会ったとき、真っ赤に激しく燃え上がる。命は死んでも良いと思えるものに出会わないと完全燃焼しない。つまり、命は常に死んでも良いと思えるものに出会うことを求めているということでもあります。**

**プロとしての仕事は、自分にとって命を懸けても惜しくないと思えるような価値を見出してこそ。どんな仕事でも本当の意味や値打ちや価値や素晴らしさを感じたのなら、人間は「死ねる」んですよ。ゴミを拾うという仕事でも、「威張って歩いている者たちの心の掃除をしているんだ」という思いでやっていたら、この仕事のためなら死んでも良いという気持ちが湧いてくる…それがプロの気持ちであります。どんな仕事にも、それ特有の意味や値打ちや価値や素晴らしさがあるんです。今自分のやっている仕事の本当の意味や値打ちや価値や素晴らしさに目覚めたならば、誰でも「この仕事の素晴らしさのために命を懸けても良い」という思いが湧いてきて、「死ねる」という気持ちになれるんです。**

**まだ自分の仕事に「死ねない」ということは、本当の意味や値打ちや価値や素晴らしさを感じるところまでいっていない証であります。仕事をするからには本当の意味や値打ちや価値や素晴らしさを感じている状態で仕事をするという自分をつくる必要があります。皆でそれを教え合って、自分を高めていく努力を惜しんではならないと思います。先輩からも仲間からも今の自分たちの仕事の本当の意味や値打ちや価値や素晴らしさを教えてもらって、仕事に燃えられる自分をつくる努力をすることが、その仕事のプロとなって素晴らしい人生を生きるための努力でもあると言**

**えます。長い間同じ仕事をしていると、なんとなくその仕事に愛着が湧いてくるわけです。結果として何かことがあったときに命も顧みず、身を挺するという行動を起こす…それが心ある人間の姿であります。**

**2011年の東北の大震災でも、小さな町役場の広報担当の若い女性が皆に避難を呼び掛けて、津波が迫っているのに皆が非難するまで必死になって叫び通し、自分は逃げ遅れて死んでしまったという。本当にその村を愛し、街を愛し、その仕事の大切さを日常的に感じていれば、そういう風に本当は死にたくないけど、生き死によりもその仕事を全うすることを選ぶことができる。それがかけがえなのない生き甲斐と感じられる。それほど自分と仕事が一体化して、愛着心が湧いて、理屈を超えて会社や仕事と一体不離の関係になることが、人間にはあり得るわけです。それにより、その仕事のプロとしての自覚・行動が出てくるわけなのです。常に自分の仕事の中に本当の意味や値打ちや価値や素晴らしさを見つけ出そうとする努力が必要なんだと思います。この仕事のためなら死ねるという姿勢で仕事をしていれば、すべてのお客様に感動を与えることができるはずです。先輩として後輩に仕事の素晴らしさを身をもって教えていくこともできると思います。とにかく、感性…感じるという力を原理にして仕事に関われば、必ずその仕事の本当の意味や値打ちや価値や素晴らしさを感じる力が出てきて、意味を感じたら人間は誰でも死ねるという気持ちになれるんです。**

**人間の心というのは、意味と価値を感じる感性と言えるんですけど、ここに人間における感性の特色があります。これが成長していくと、「このことのためなら死ねる」という思いになってくるわけです。親であれば子どもの存在価値にかけがえのない思いを持っています。「この子のためなら死ねる」という気持ちはすべての親に潜在的にある思いと言えます。理性的になった親は子どもが邪魔だと、殺してしまう。そんな酷いことをしてしまう親も出てきましたけど、それは理性に支配され、理性の奴隷となって、血の通った温かな心が奪われてしまった悲しい親の姿です。しかし、例え理性に支配されようとも命の根底には、かけがえなのない子どもの命のためなら自分を犠牲にできるという思いが宿っているはずなんです。だけども、理性的になるとそれは出てこない。利害損得が頭に浮かぶと、子どもは邪魔になってしまう。しかし、利害損得などが浮かばず、子どもの顔を見ているだけで幸せだと思い、頬ずりをしながら「この子のためなら死ねる。どんなことでもしてあげられる」となっていくのが親の心であります。**

**とにかく、「死ねる」という思いが出て、初めて美しい人生、美しい仕事の仕方、感動的な生き方が出てきますので、そういう意味では最高の仕事の仕方というのは、「この仕事のためなら死ねる」という思いから出てくると言えます。どうせ仕事をするならそこまでいかないといけない。本当に命を懸けても良いという思いになるためには、いろんな本を読んだり、いろんな人の話を聞いたりして、本当の意味や値打ちや価値や素晴らしさを追求して、本当にすごいんだなと自分の感性で感じ始めるまで学ぶことが大事。ぜひ、そういう体験、思い、感動をしてもらいたいと思います。**

**第六番目は、最高の満足を与え、最大の信頼を得る経営。**

**仕事というのはお客様にどこの同業者よりも、最高の満足を与え、最大の信頼を獲得するのが、すべての職業人の理想なんですね。そのために努力するということが、対お客様との関係での目標であります。その目標を持つことで仕事の仕方や心遣いなどがどんどんどんどん成長していきま**

**す。一旦、その信頼関係ができれば、お客様もあなたに対して「あの人に頼みたい」となり、その評判はどんどん口コミで広がっていくことになります。どうしたら最高の満足を与え、最大の信頼を得られるのか。やはり、自分ひとりでは限界があるので、チームでお客様の要望に応えていくことが必要で、仕事に対する姿勢も大事になってきます。**

**そのためにも心を満たすということが大事で、いろんなことをする上での大事な原理となってきます。お客様の要望を満足を得るレベルで応えようと思ったら、やはりチーム力が大事な原理となってきます。自分ひとりでは限界がある…背後からのバックアップがあって初めて自分の力が表現される。どうしたらチーム力を高められるか。会社、プロとしての仕事の仕方の美学、華があるということになります。TVやドラマで観るとわかりやすくて、一人でやっている業績や成果の背後には、チームの努力やサポートが欠かせないということがよく描かれています。お客様に最高の満足を与えるためには、仕事の理念というのが大事な課題になってくると思います。最高の満足を与え、最大の信頼を得るというのは、仕事をしていく上での理念として、ぜひ覚えておいてもらいたいと思います。**

**次は第七番目の限界へ挑戦する経営。**

**常に人間の力には限界があります。普通の人は今の自分の持っている力の限界内でできることしかしようとしないのが仕事の仕方ですが、それでは時代の要請やお客様の要求を満たす仕事が十分にはできません。そういう意味では、今の自分ではなんともならんけども、要望が出てきたならば、それに応えるだけの自分をつくっていこうとすることで、我々は成長を遂げることができます。今の自分ではなんともならんという問題にぶつからないと、自分の持っている潜在能力は出てこないんです。自分の持っている潜在能力が出てくることによって、本当の自分の成長が達成されるわけなので、できることしかしようとしないのはプロではない。新しい時代をつくるために生まれてきた人間として、職業における使命を果たそうとしたら、今の自分が持っている力でできないこともできるようにしていこうとしないと、自分も会社も成長・発展しない。時代の要請に応えられないとつぶれてしまう…会社というのは常にそういう厳しい現実と直面している。今の自分が持っている力でできないこともできるようにしていかないと、生き残れない。うっかりしていると他社に追い抜かれてしまって、を拝してしまう。常に限界への挑戦をするというのは、人間においても会社においても心しておかないといけない姿勢と言えます。限界への挑戦なしに潜在能力は出てこない、新しい力は出てこない。**

**現実的には限界への挑戦は苦しいし、辛いもの。さらに努力も求められ、なかなか成果・結果が出てこない苦しみもあります。だけども、限界への挑戦なしには生き残れないのもまた現実です。問題や悩みや苦しみというものから、どれだけ逃げないで仕事ができるかというのも、非常に難しいけれども大切な構えと言えます。逃げないという気構えをどこまで持ち続けることができるかということです。**

**人生を考えると、命に痛みを感じるような体験があって初めて、人間は命の根源から湧いてくるような気付きがあって、それによって成長していく。人間の深みというのは、命に痛みを感じることを通して行なわれる。深みというのは新しい潜在能力や気付きが湧いてきたりすることで、**

**命につくられていきます。深みのある人間、深いことが言える人間になるためにも問題や悩み、苦しみから逃げないで頑張ることが大事なこと。それが人間性の深さをつくる原理としても大切なんです。**

**命に痛みを感じるような体験を通して、真実を語る力が出てきます。体験は真実を語る力で、体験は体験した者にしかわからない、語れないものです。どれだけたくさんの知識を持っていても「百聞は一見にしかず」と言われるように、体験しているかどうかが大事になります。「行ってみたらこうだった」ということには、いかなる知識も対抗できない。体験から掴んだ確信、支えられた自信ほど人生において強いものはありません。やはり、人生は行動しないと、やっていないとわからないので、そういう姿勢は大切になります。**

**とにかく、限界への挑戦なしには潜在能力は湧いてきません。今の自分が持っている力でできることしかしないという人は、命の成長が止まったという状態で、本当の人間としての成長は見込めません。**

**次の第八番目は、利益が出る仕組みを作り続ける経営。**

**会社をつくるということは、利益の出る仕組みをつくるということなんですね。会社が利益の出る仕組みをつくってから人を雇いますので、社員というのは利益の出る仕組みの中で働く人と言えます。経営幹部は利益の出る仕組みをつくって、社員がどんどん増えたら利益が生まれるということになりますから、仕組みをつくることに経営をすることの目的があるわけですね。**

**常に時代は動いていますし、同業他社との競争という関係性もありますので、一旦できた利益の出る仕組みというのをつくっても、利益の出ない仕組みに転換してしまうことも常に起こります。会社というのは常に一円でも多くの利益の出る仕組みというのをつくり直し続けるということをしていないと、動く現実の中で立ち遅れてしまう。常にその危険性の中で仕事をしているわけですね。これも理性的に仕組みをつくって固定化するのではなく、スクラップアンドビルドを繰り返して感性を原理にしないと、生きた現実に対応できる生きた会社の在り方を維持することはできません。これは、経営者だけではなく、全社員が協力することが大事なので、その意味でも無駄を省いてお金を使うべきところにお金が回っていくようなシステムをつくり、組織改革を行っていく必要があります。全社員が協力して「こうしたらもっと倹約できるのでは」と提案・提言をして、現場の社員こそ発言し、上に意見をして、会社を利益の出る体質にしていくことやり続けないと、健全な利益の出る経営を維持することが難しいですよね。**

**無駄を省くというのは国会でもやっていますが、ついついうっかりすると、使わなくても良いところに使ってしまって、無駄遣いになってしまっている…そんなことも会社の中で多々あるので、厳しく査定していかないと、社員が納得できるような給料を払えるような会社の体質にはなっていきません。また、そのためには社員の協力が欠かせません。昨今、全社経営と言われることも多くなってきましたので、そういう意味で社員一人ひとりも自分の給料を増やしていくために経営的な感覚を持って、無駄を省くことや提案・提言をすることで関わっていってもらいたいと思います。**

**次は第九番目ですが、結果が出るまで止めない経営。**

**会社というところは時代の要請に応じていろんなことに挑戦していきますが、なかなか失敗が続**

**いて成果があがらない…そうなると撤退しようと、せっかくやり始めた努力も止めてしまうことが非常に多い。それでは目の前の問題を乗り越えることができませんから、うっかりすると同業他社に負けてしまうことになりかねません。結果が出るまで止めないという仕事の仕方を身につけていこうと思ったのなら、何が一番大事になるのか。それは、どんな問題や悩みでも必ず答えがあるということを知ることで、答えの無い問題や悩みは無いんだという認識を持つことです。**

**何回も失敗が続いてしまうと、これは望みが無いなと止めてしまうことが多いですが、エジソンの伝記を読むと成功は数限りない失敗の上に成り立っていて、最初からうまくいくことはないと理解できます。失敗をどう解釈したか。失敗はマイナスではない、失敗はこうしたら失敗するという成り立ちを理解していくことなので、失敗することで成功に近づいているんだと。失敗を続けることで成功の確率が高まるんだと考えて、失敗しても挑戦し続けることが大事なんだということが、発明王の言葉であります。**

**失敗しても諦めないことと同様に大事なことは、どんな問題でも答えがあるということなんです。本当の問題は今の自分が持っている力でなんともならんということであって、今の自分が持っている力でなんとかなるものは、問題ではないんです。問題は、自分を成長させるために母なる宇宙が自分に与えてくれるものなんです。それは命をつくってくれた母なる宇宙が、命を成長させるために与えているものです。今の自分が持っている力でなんとかならんという問題が出ないと、命から湧いてくる潜在能力が出てこない。**

**この命から湧いてくる潜在能力とはなんなのか。生まれながらに命に与えられている遺伝子が潜在能力と言われるものです。今の自分が持っている力でなんともならんという問題は、命から潜在能力を引き出すために出てくるんだ。それは、生まれながらに命に与えられている遺伝子なんだ。それが問題を解決する答えなんだ。つまり、答えは生まれながらに命の中にあるのだから、問題が出てくる以前から存在するということになります。すなわち、どんな問題でもその答えはすでに命の中にあるんだ。そして、問題と答えは一対であるとも言えます。また、そういう構造が命にはあると言えます。諦めなければ必ず答えに到達する。諦めなければどんな悩みでも乗り越えられる。この命が持っている構造と原理が、絶望を乗り越える力になるわけです。実際問題、成功した人というのは答えが出るまで諦めなかった・止めなかった人なんだ。あの有名な松下幸之助の本にも、「成功した人とは、うまくいくまで止めなかった人」と書いてあります。当たり前なことなのですが、これは非常に重要な原理なわけです。**

**では、なぜうまくいくまで止めないという生き方ができるのか。その根拠はなんなのかということを追求していくと、今申し上げた答えがわかるわけです。問題が出てくる以前から答えはある。答えの在り方ももっと深く考えていくと、命というのは宇宙の摂理によってつくり出されたものだから、宇宙の持っているエネルギーがすべて込められている。人間には相応しい遺伝子が与えられていて、その遺伝子は潜在能力として存在しますが、さらにその潜在能力を超えた宇宙の力が命には宿っています。よく言われる火事場の馬鹿力のように、いつもは持てないようなものがいざというときには持ててしまう。本当かどうかはわかりませんが、信じられないようなすごい力が命から湧いてくることがある。**

**本当に必死になって生きた場合、「なんであのときはあんなことができたのだろうか」と思える**

**ような体験が語られることがあります。なぜそんな力が湧いたのか。それは命には人間の力をはるかに超えた宇宙の力が宿っているからなんです。生きているのは、我々の力ではありません。眠っていても生きているということは、生きよう生きようとしなくても命をつくった宇宙の摂理の力によって、命は生かされていると言えます。命には常に宇宙の摂理の力が働いているんだということです。我々は、常に命の中に宇宙の摂理の力を秘めて、生きているということです。だからこそ、どんな問題も悩みも乗り越えられると言えるので、そういう信念を持たないといけません。そういう信念を持つことによって、失敗しても止めなければ必ずうまくいくという結果に結びつくんだという気持ちになれるわけです。**

**人生、いろいろな問題で悩んでおられる方もいらっしゃるかと思います。とにかく、諦めなければ道は拓けるということを信じてやってもらいたい。**

**とは言え、一人の人間の力には限界があります。自分だけの力ではなんともならんという状況になったら、問題を乗り越えることができる力を持った人を探し出して、その人に助けてもらって、アドバイスをもらって、教えてもらって問題を乗り越えていく。こういうことも考えなければならない。このことを仏教の言葉で「三人寄れば文殊の知恵」と言います。人間一人の力には限界がある。しかし、三人になれば仏の知恵に迫ることができて、問題を乗り越えていく答えが出てくるんだという考え方であります。なぜ三人なのか。それは人間の世界は三次元という構造で現実の空間では、一人称二人称三人称という構造で成り立っていまっす。自分だけの考えだけでは偏っているし、相手の考えだけでも偏っているし、第三者の考えだけでも偏っている。でも、この三つの考えを統合すると、生きた現実に肉薄する答えが出てくるというのが、「三人寄れば文殊の知恵」ということなのです。**

**問題を乗り越えることができる力を持った人を探し出すのも自分の力なんです。助けてもらったら自分の力ではないと思ったらいかんのです。探し出すことも自分の力、そして、できることならあと二人の人間に助けてもらって、その問題を乗り越えていく…そういう生き方を我々は覚える必要があります。会社の上でも経営上でも最低でも三人の力を集めて、仕事を完成度の高いものにしていくということも考えなければなりません。**

**昔流行ったNHKのドキュメンタリー番組で、人生において奇跡的な仕事の結果を出した人物の苦闘のプロセスを追った、「プロジェクトX」というものがありました。あれも今の自分の持っている力ではなんともならんという問題にぶつかりながらも、失敗を続けても途中で止めなかった、絶望を乗り越えて必死になって努力して、結局答えが出るまで止めなかったという不可能を可能にしたドキュメンタリーなんですね。つまり、不可能を可能にする力が命には宿っているということなんです。ぜひ、不可能を可能にするドラマチックな仕事の仕方を人生において体験するような生き方をしてもらいたいと思います。諦めなければ必ず成功できる、諦めなければ必ずうまくいく、結果があるんだということを信じて断行していくしかありません。**

**最近は人間の命というものを宇宙との繋がりという関係性から理解することが、随分と進んできました。人間の命が宇宙と繋がったとき、どんなに素晴らしいことが起こるかということが、いろいろとわかってきているわけです。宇宙と繋がったときの命のすごさ。普通の意識の状態では、宇宙との繋がりが切れている。それはどういう状態かと言うと、命には宇宙の力が働いているのに我々が作為的・人為的な理性の力に頼って、いろんなことをしようとしているから。それ**

**があまりにも多すぎると、せっかく宇宙と繋がった命が繋がりを引き出せずに、理性の力によって断ち切ってしまって、自分だけの力でなんとかしようという小賢しい作為に満ちた生き方になってしまう。**

**そこで、理性というものはなんなのかということをもっと知っていくと、そういう問題点がわかってきます。実は、我々が理性と呼んでいる能力は、他人がつくった知識や技術を学習して、自分のものとして使っていることなんです。理性能力というのは、ズバリ、パクリなんですね。本当の自分の力とは違う。人が使った知識や技術を学校や本を読むことで覚えるんですよ。それを自分のものにしたと思って使っているのですが、それはすべて他人がつくったもの。パクった力でなんともならん…だけどなんとかしないと思って頑張っていると、自分の命から潜在する能力が出てくる。そこから自分の力で生きる人生が始まるんだということなんです。自分の命から湧いてきたものですから、本当の自分の力と言えます。そして、実際に不可能を可能にした仕事の仕方というのは、パクった力の限界を超えて、命からより以上の力が湧いてきて、問題を乗り越えていく…そこから本当の自分の人生が始まるのです。これは特別な人間にしかできないことではなくて、原理を覚えたのなら、誰でも可能なこと。やろうと思ったら、宇宙の力を自分の命から引き出すことができる。誰にでも与えられている力であり、生き方なんです。**

**大事なことは、諦めるか諦めないか。なんともならん…だけどなんとかしたい！ なんとかしよう！という努力をしていると、命に潜在する能力が出てくる。潜在能力が出てくるというのは、どういう状態で出てくるのか。どうしようもない問題にぶつかって苦しんでいるという状態は、死へ向かっているときのようにに苦しい状態と言えます。しかし、命には常に命を生かそうとする宇宙の摂理の力が働いていますから、人間が苦しめば命の中で命を生かす力が増幅し始める。そもそも人間の命をつくったのは、母なる宇宙の愛の力であります。そして、苦しんで苦しんで、なんとかしたい！と思っていると、その愛の力がなんとかしてあげたいと思うのです。苦しむということは、母性愛をくすぐるという状態なんですね。なんとかしてあげたいと、母なる宇宙が思ってくれる。すると、今直面している問題の答えは、あなたに生まれながらに与えられているこの力、この潜在能力が必要なんですよと教えてくれる。母なる宇宙が顕現してくれる。苦しんでいる人間にしてみれば、後から気が付くという状態。潜在能力が出てくるのは、自分の力ではない。あれは宇宙の力が助けてくれて、母性愛をくすぐるという状態になっている。だから、体験した人のほとんどがなんと言うか、「天の助けだ」「これは自分の力じゃない」「神仏の助けだ」と。実際にそうなんですよね。母なる宇宙の母性愛ゆえに湧いてきたものが、潜在能力の顕現なのですから。**

**理性ではどうにもならないところで、感性で頑張るという努力の仕方というものが見えてこないと、人間の命は宇宙とは繋がりません。理性に頼っている限り、作為の世界ですからね。これでは宇宙の力は働きません。そういう意味でも限界への挑戦、今の自分が持っている力の限界へ挑戦することで、結果として宇宙との生命の繋がりを実現して、あらゆる答えが宇宙から湧いてくるという状態になるわけです。これは誰でもなれる。だけど、小賢しい理屈で、理性で考えてやっている限り、永遠に宇宙との繋がりというのは実現しません。**

**とにかくは、理性ではなんともならんという状態に到達して、だけど、なんとかしたい！ という思い、欲求というものに基づいて、諦めずに生きる。そうすれば、誰でも宇宙と繋がって、宇宙から答えが湧いてきて、そして、信じられない人生が始まる。本当の自分の力で生きるとい**

**う、宇宙と繋がった命こそ、本当の自分の命なんですよ。我々自身も宇宙ですから、宇宙は我々の外にあるんじゃない、我々自身がこの大宇宙の一部分を占めているのです。命の中にはすべての宇宙の力が込められている。だから、人間が小賢しい理性の作為をやめれば、命から宇宙の力が湧いてくるという構造ができるのです。それがために悟りや瞑想、ヨガと言われる世界では、とにかく考えるなと言うのです。命が宇宙と繋がる状態に持っていく修行方法があるんです。とにかく、理性を使ってはいけません。**

**だけども、一旦、宇宙と繋がって、宇宙からいろいろと教えてもらえるという状況になったら、せっかく人間は理性を持っているんですから、理性に頼るのではなく理性を手段能力に使って、宇宙から教わったいろいろなことを原理にして、いろんなことを社会においてやっていく。人間が理性を支配して、使いこなす力がやがて出てきます。これが理性を超えて感性で生きるという生き方なんですね。**

**我々が「私・俺・自分」と言っているものは本音と実感、欲求ですから。欲求が無いというのは俺が無い。欲求が無かったら俺の人生はつくれない。したいことが無かったら、他人に言われたことをさせられた奴隷だ。私は感性だ。命の本質も感性だ。命も感性で生きている。命が死んだという状態は呼吸が止まって、心臓が止まって、死んでいる人のまぶたを開いてペンライトを当てて瞳孔が開いたら、まだ生き返るかもしれないからと言って、心臓マッサージをしたり、電気ショックを加えたりと蘇生術を図るわけです。呼吸も心臓も止まっていても感性さえ働いていたら、まだ生き返る可能性がある。そういうことを見ても、命を支えているのは感性だということがわかるわけです。単細胞生物にすら感性が働いていて、感性が働いているからいろんなものを感じて、単細胞生物でも生きていることができる。この生命を支えている感性はどこから来たのかと言ったら、宇宙が命をつくったのだから、感性も宇宙から来たと言う以外にない。だから、我々は感性を通して宇宙と繋がっているんだ。ゆえに理性ではなく、感性を原理にして生きないと宇宙の力を借りた人生は始まらない。**

**最後の人格を成長させる経営。**

**仕事はお金のためにするんじゃない。仕事をするということは、人に喜んでもらえるような仕事の仕方をしないと、仕事は成り立たない。人に喜んでもらえないような仕事をしていたのでは、お金は入ってこない。どういう風にしたら人に喜んでもらえるのかを知るために、仕事を実践するわけです。仕事・職業というのは、従事する人間を人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性を持った、本物の人間につくるためにあり、成長させる働きを持っています。お金は後から入ってくる。まずは、仕事をするということは、人に喜んでもらえるような仕事の仕方をする力をつくるためだ。職業というのは、人を幸せにすることによって、自分が幸せになる活動のこと。本当の幸せは人を幸せにする力をつけないと、自分にやってこない。自分が幸せになろうと思ったら必ず人を犠牲にしてしまう。人を犠牲にすれば必ず自分に返ってきて自分も不幸になってしまう。人を幸せにする努力をすることによって、結果としてその努力が自分も幸せにしているということ。その具体的な活動が職業なんです。**

**職業を通してお客様と関わったり、いろんな人と仕事をしたり、お客様に喜んでもらうだけではなく、一緒に仕事をする仲間にも喜んでもらって、感謝してもらうような仕事の仕方をしないとプロじゃない。お客様に喜んでもらうだけでは半分だ。一緒に仕事をする仲間にも喜んでもらっ**

**てプロになる。そのような仕事の仕方ができる能力と人間性をつくることによって、我々はプロの仕事ができて、人を幸せにすることによって、自分が幸せになれる…そういう結果が出てくるわけです。人が喜んでくれて、その感謝の印としてお金をもらう、それによって自分はお金を得て豊かな生活ができる。この循環が職業が持っている社会的な機能。そういう意味で、感性経営の最後は人格を成長させる仕事の仕方、経営をしていくことが大事であると。お金は後から入ってくるものだ。まずは人を幸せにする力をつくらないと、お金は入ってこない。仕事をする目的は、人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性を自分の中につくること。それがまず第一番目の仕事をする目的だ。**

**すべてで十項目ありますけど、感性経営の神髄という感性を原理にした仕事の仕方の具体的な内容であります。**

**どうもありがとうございました。**